

## 淀城の米蔵跡

<http://www.kyoto-arc.or.jp>  
 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



発見された淀城米蔵跡 中央に布基礎が延び、左手に礎石跡が並ぶ。(東から)

桂川、宇治川、木津川が合流し、東には巨椋池が広がる淀は、古くから交通の要所でした。西日本から淀川の水運によって平安京に運び込まれる様々な物資は、淀にあった港で陸揚げされました。

京阪電車淀駅周辺は、もともと川の中島でしたが、中世にはここに「魚市」という卸売市場が存在し、都に運び込まれる塩や、塩で加工した海産物の販売を掌握していました。また、戦国時代には戦闘の拠点として「淀城」がたびたび史料に登場しますが、これは現

在の納所付近に存在したようです。秀吉の側室淀君の産所として修築した淀城もここにありました。

淀駅の北西に隣接して石垣と堀が残る淀城は、廃城になった伏見城にかわる新たな京都護衛の城として元和9年(1623)から寛永2年(1625)にかけて築かれたものです。現存する石垣と堀は天守閣と本丸部分のみですが、本来はその周囲に二ノ丸、三ノ丸、東曲輪くまわなど城の施設が広がっていました。淀駅周辺の市街地もかつては城の内側だったのです。

2003年度から淀駅近くで行なっている発掘調査で見つかった淀城の米蔵跡を紹介しましょう。

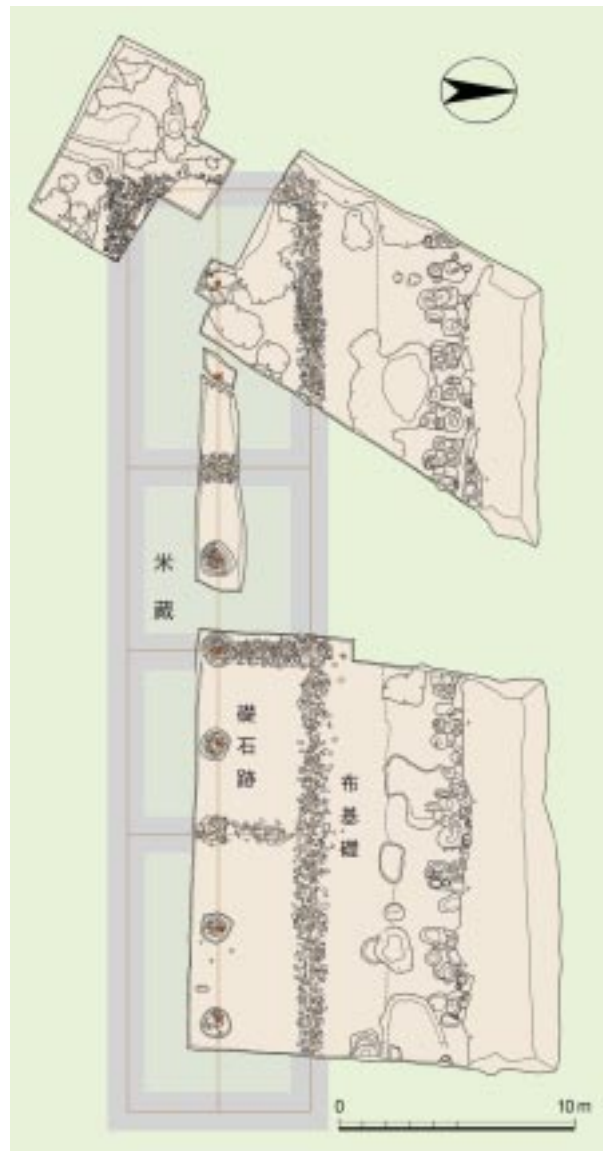
米蔵の跡は4つの調査区にわたって見つかりました。上屋は残っていませんから、発見したのは米蔵の基礎の跡です。米蔵に限らず、一般に蔵は厚い土壁で作られています。土壁は大変重いので、これを支えるために「布基礎」という帯状の基礎を作ります。見つかった布基礎は、幅2~3m、深さ1~1.5mの溝の中に10~50cm程もある石をぎっしり詰め込んだ立派



『笹井家本 洛外図屏風』淀城部分（が米蔵）  
大阪府高槻市教育委員会所蔵



礎石跡の断面



米蔵平面復元図

なものでした。この布基礎が30m以上にわたって見つかりました。また、外壁から建物の内部に向かって直角に取付く布基礎が3箇所あり、建物の構造を支えながら内部空間を4つに区切っていたこともわかりました。

棟を支える礎石の跡も7箇所見つかっています。礎石自体は残っていませんでしたが、穴の中央に礫で根固めた大きな石を入れた、据え付け穴が残っていました。柱と柱の間は約4mありますが、これは京間（1間=1.97m）で2間分に相当するようです。礎石跡と

外壁の布基礎の間も約4mになっています。京間を基本単位として全体の規模を復元すると、東西39.40m、南北7.88mもある長大なものとなります。

発見した米蔵跡の基礎は、大変立派なものですが、それは米蔵の下の地層に関わりがあるようです。米蔵の下の整地層は、川砂を用いた軟弱な整地層でした。淀城を作るときに全体に地盤を1.5m以上かさ上げしているのですが、その際に近くの川原にあった砂を用いたのでしょう。軟弱な地盤の上に堅牢な建物を建てるために、こうし

た入念な基礎工事がなされたようです。川砂を用いた整地と、それに応じた入念な米蔵の基礎工事は、川の中島の不安定な地盤の上に築かれた淀城の築造技術を知るうえで大変興味深い資料といえるでしょう。

この米蔵が建てられた時期は今のところはっきりしませんが、17世紀代の絵図にこの米蔵が記されていることや地層の状況からみて、淀城の築城時か、それから間もない江戸時代の前半代に作られたものと考えています。

（内田 好昭）